

特集：市民参加で自然しらべ：活動事例紹介～植物を対象とした活動から～

## 行政との協働から生まれた研究グループ

千葉悟志（大北地域の湿地植物の生活史研究グループ・市立大町山岳博物館学芸員）

「大北地域の湿地植物の生活史研究グループ（以降、湿生研）」は市立大町山岳博物館（長野県）が平成20年に企画した「くさばなの一生 湿原でみられる植物の生活史 その営みとなぞにせまる！」に参加したわずか4人、全員が60歳代の主婦というメンバーで構成されています。



写真1 居谷里湿原での観察（2月）

主に長野県の北西部に位置する湿原を中心に観察を行っています。ここでは、企画展開催に至るまで過ごした時間についてご紹介いたします。

その前に、博物館の設立についてご紹介します。博物館が信濃大町に誕生したのは昭和26年11月1日のことです。稀にみるこの地の山岳環境と自然を見つめ直し、地域の文化を求める拠点を作るため、この地の青年たちが立ち上がりました。その運動はやがて地域住民の熱い支援を得るところとなり日本初の山岳博物館を生み出しました。60年を経過した今でも地域住民からは「さんぱく（山博）」の愛称で親しまれています。

平成20年の冬、博物館は設立当初の思いに立ち戻るかのように地域住民とともに協働でつくる本展を計画し、参加を呼びかけました。そこに集まったのが4人のメンバーでした。活動は翌1月から開始し、観察地が雪で閉ざされている間は事前学習会を行い、それ以後は湿原に赴き、晩秋まで観察を続けました。また、企画展の目玉とする発芽から開花に至るまでの「生活史」についても博物館や自宅で実生を育てながら観察を行いました。観察項目は多岐にわたりましたが、その甲斐あって平成23年10月29日から開催された企画展では、成果をつづった130頁にも及ぶ解説書が最終日を待たずして完売する

など好評のうちに終了することができました。



写真2 企画展開催の記念写真

さらに今年からは、通いなれた居谷里湿原で大町市文化財センターが主催する「自然観察会」に4人が講師を務め、自分たちの体験を含めた解説で訪れた方に楽しんでいただいています。

「湿生研」では、これからも地域の自然をみつめながら活動や交流の場を広げるとともに、研究グループとして得られた成果を博物館を通して広く発信していきたいと考えています。

URL <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/alpine2.htm>



写真3 観察会で参加者に解説するメンバー

